

## Virgil Moser: Frühneuhochdeutsche Grammatik. I. Band: Lautlehre. 1. Hälfte: Orthographie, Betonung, Stammsilbenvokale. Heidelberg 1929

藤井明彦

著者のヴィルギル・モーザー（1882年～1951年）は「初期新高ドイツ語」研究の草分け的存在。薬剤師志望だったが、父親から、生活が保障されているお前は他人の就職の邪魔をしてはいけないと言われて諦め、大学でドイツ文学を学び始める。その後ドイツ語史の研究に転じ、20代後半に最初の著書（初期新高ドイツ語の概説書）を出版するが、博士学位も取らず、大学の教職にも就かず、在野の研究者として生涯を過ごした。表題の著書（全215ページ）は14世紀半ば～17世紀半ばのドイツ語の音韻とその文字表記について記したもの。叙述の中心は、この時期に中世と近世を分ける大きな変化が起こった幹母音の表記だが、それが上部ドイツ語方言（バイエルン、シュヴァーベン、アレマン方言）、中部ドイツ語方言（ラインフランケン、テューリンゲン、上部ザクセン方言）等々の方言区域別に書かれていて、しかも公文書、手写本、印刷本という、今で言う「メディア」による違いも記されている。中世盛期のドイツ語の研究が中心だった時代に、中世後期・近世初期のドイツ語に関する包括的で詳細な研究がまとめられたことに驚くが、記述の多くはモーザーが20年近くかけて自ら蒐集した言語資料に基づいている。蒐集はバイエルン州立図書館を拠点にして行われたようだが、目の前の写本や印刷本を見て短母音・長母音・複母音の表記、さらに唇音、歯音、喉頭音等の子音の表記（子音は1951年に刊行された続編で扱っている）の特徴を把握し、それを地域、メディア、時代の流れの中に位置づけることが出来る研究者が果たして他にいたのだろうか。今でも「ヴィルギル・モーザーの言っていることは大筋で合っている」というのが研究者間の定説である。もちろん現代風の統計的な研究を行うと細部には異論の余地が見つかるが、後続の研究のためにまずは全体像を提供することを目指したモーザーにとっては、それも織り込み済みだったかもしれない。

筆者は在外研究中の1993年に全体を改めて通読した。この本はまず言語変化の主要な流れを述べ、その後で資料に出て来る語形を丹念に拾っていくという構成をとっている。自分が資料分析をする際に、この語形はどこかに載っていたはずだと探すことがしばしば起こると思い、数週間かけて幹母音の表記に関する部分（150ページ程度）をワープロソフトに打ち込んだ。確認したい語形がファイルで「検索」できるようになったのは非常に便利だったが、「ai書法の変わらぬ例外はバイエルン方言では*fleisch*, *geist (-lich)*, *heyilig (heilum)*のような*volkstümlich*ではない語（ただしいつも決まって*das hail*）、[中略]シュヴァーベン方言の影響下にある印刷本では…」のようなモーザーの息の長い文章を打ち込んでいくこと自体に何とも言えない充実感があつた。